様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３２６３６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０３５７９

研究課題名（和文）1860年代末のマルクスの信用と恐慌の研究（抜粋ノートの編集とその活用）

研究課題名（英文）Marx's research on credit and crisis at the end of the 1860s (edition of excerpt notebooks and its utilization)

研究代表者
竹永　進（Takenaga, Susumu）

大東文化大学・経済学部・教授

研究者番号：００１１９５３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　マルクスが彼の主著『資本論』の全3部の仕上げのための作業に集中していた1860年代の中頃にイギリスで発生した、それ以前とは異なる独自の性格をもった恐慌について、彼が1868年の秋から１年間をかけて作成した抜粋ノートと切り抜き帳のオリジナルを、新メガの第四部門第19巻に収録するためのデジタルテキストに変換する作業が、本研究の中心であった。当初の見込みを超える膨大な作業量のため当該ノート・切り抜き帳のうち後者の一冊のみは今回の研究期間後の作業に委ねざるを得ない結果となったが、全体としては課題はほぼ達成できたと考える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　マルクス生誕から200年、また彼の主著『資本論』第1部初版刊行から150年を隔てた現在、マルクスの文献的遺産はこの間彼の祖国ドイツに限らず広く世界の多くの国・地域において甚大なプラス・マイナスのインパクトを与え続けた。20世紀末のソ連・東欧諸国の社会主義の崩壊とグローバリゼーションの進展のなかで一時忘れさられたかのように見えた彼の思想と理論は、新たな歴史的コンテクストにおいて再び人々の注意を惹いているように思われる。こうした世界史的状況において彼の文献的遺産をオリジナルのままに再現しようとする新メガのプロジェクトの一部を担うことが本プロジェクトの狙いであった。

研究成果の概要（英文）：　On the economic crises with some particular characteristics in comparison with the foregoing crises, occurred during the mid-18160s in England, when Marx was concentrating his research effort on drafting the manuscripts for all the three volumes of Capital, his opus magnum, during one year from the autumn 1868 on, he made an enormous amount of excepts and scraps from newspapers published in London in 7 notebooks. The main aim of this research project was to convert these original excerpts and scraps into digital text to be included in the volume 19 of Part IV of new MEGA now being published in Berlin. Due to the enormous amount of work far surpassing the prospect, of the total 7 notebooks only one had to be left to the task after the present project, but on the whole the task imposed at the outset can be considered to have been accomplished during these three years.

研究分野：経済理論・経済学史

キーワード：マルクス　資本論　経済恐慌　抜粋ノート　草稿研究

## １．研究開始当初の背景

1990 年代初頭のソ連・東欧の社会主義の崩壊にともない、70 年代から開始されていた新メガ（歴史的批判的マルクス・エンゲルス全集）の刊行事業は一時危殆に瀕したが、国際的な協力体制の下で新たに再開された。旧体制の下ではこの刊行事業は旧ソ連・東独の政権政党の中央委員会の直接の指導と財政的バックアップを受けていたが、その消滅とともにこうした特権的な支援もなくなり、新体制下での貧弱な予算と人員を国際的な協力によって補完することが事業の継続のために不可欠となった。従来からマルクス研究がさかんで他の先進諸国に比べれば関係者の数も相対的に多い日本の研究者の一部もこれに加わることとなり、1998 年にはメガ日本編集委員会が発足した。そして、国際的な編集主体である IMES（マルクス・エンゲルス財団、本部：アムステルダム）より新メガ第Ⅳ部門の第 17 巻から 19 巻までの三つの巻の編集を正式に委託された。当初より日本で作業が始まり比較的進捗していた第 18 巻に続いて、それまでほとんど編集作業に手がつけられていなかった第 19 巻（マルクスが 1868 年から 69 年までにに作成した恐慌をテーマとする 7 冊の抜粋ノートを収録する予定）の編集を加速させるために、竹永が研究代表者となり 2011 年度より 4 年間にわたって科学研究費補助金（基盤研究 B）の交付を得て鋭意編集作業にあたった。2016 年 4 月からの今回の 3 年間にわたる研究はこの事業による作業を受け継ぐものである。

さらに本研究の期間は、マルクスによる『資本論』第一部刊行から 150 年目、そして著者であるマルクス当人の生誕から 200 年目と重なるため、これらの機会に開催が予定されていた国内外の記念シンポジウムの組織・運営活動に積極的に加わるとともに、これらに関連する研究を行うことを予定していた。

## ２．研究の目的

本プロジェクトによる研究の中心目的は、上記の新メガ第Ⅳ部門第 19 巻の刊行に向けて、その基礎作業としてマルクスの抜粋ノートの内容を電子テキストに変換していくこと、ならびに、マルクスがこれらの抜粋ノートを作成するにいたった歴史的経緯および彼自身のそれまでの研究経過について調査し抜粋ノートの性格に対する理解を深め、これをもとに新メガの各巻に付される付属資料に収録される編集者序文の執筆のための予備作業とすることであった。

こうした全体的な目的は前回の事業と変わらないが、今回はここから一歩進んで一旦作成された電子テキストを、マルクスの作成した抜粋そして抜粋の元となった新聞（その大部分は当時ロンドンで刊行されていた週刊紙 *The Economist* と *The Money Market Review*）および P001, P.002, P.003 という番号の付された切り抜き帳に貼り付けられた新聞記事（大部分は日刊紙 *The Daily News* からのもの）のそれぞれと二重に照合チェックして、新メガのテキストとしての体裁を整えることであった。また、マルクスが抜粋ないし切り抜きを行なっているこれらの新聞の記事のオリジナルの確認（刊行の日付と所在ページ数の特定）において、前回の作業で十分に達成できなかった点をおぎなうことも今回の事業の目的に含まれていた。

## ３．研究の方法

新メガの第Ⅳ部門の編集は、マルクス（およびエンゲルス）が生涯にわたって作成した抜粋ノートを電子テキスト化し活字媒体によって研究者の利用に供することを趣旨としている。そのためまず必要なのは、アムステルダムの社会史国際研究所(IISG)とモスクワのロシア国立社会・政治史アルヒーフ（RGASPI）に所蔵されているマルクスの抜粋ノートのオリジナルをパソコン画面上で見ることのできるデジタル画像に変換し、これを、1920−30 年代にモスクワで旧メガの準備作業の一環として作成されていた解読タイプ原稿と照合しながら、手動でデジタルテキストに変換する（パソコンに入力する）こと、そして、さらにこれを、マルクスが抜粋した元の文献（第 19 巻の場合、そのほとんどは当時イギリスで刊行されていた週刊・日刊の新聞）と照合して、抜粋箇所の内容のオリジナルとの異同を逐一記録していくことである。こうした地道で膨大な作業を積み重ねることが本研究の基本的な内容である。

これらの作業は前回の事業において、複数の研究分担者と研究協力者（後者は主として日本とドイツ人ネィテブの大学院生とポストドクター研究生からなる）からの協力を得ることによってまた、全体としては完了していた。今回は基盤研究 C というより小規模な枠組みにおいて、前回の事業でのやり残しをおぎないその結果について再度チェックをかけることに主眼が置かれた。

また、マルクスが抜粋ないし切り抜きを行なった元の文献（その大部分は 2.で触れた三種類の新聞であるが、その他いくつかの新聞も少数ながら含まれる）の画像データを収集するために、ロンドンのブリティッシュ・ライブラリーなど直接現地に出かけて調査することも必要であった。

## ４．研究成果

本科研費プロジェクトの中心目的は新メガ第Ⅳ部門第 19 巻の編集作業とりわけその基本である当該巻のテキストの作成にある。この点は今回の事業も前回と変わらない。前回は 4 年間にわたるプロジェクトと交付された補助金をもちいて、2015 年 3 月の終了時点までに本巻に収録予定の 7 冊の抜粋･切り抜きノートの内容をすべてデジタル･テキスト化することができた。

今回はこれを元にさらにテキストの仕上げをはかるとともに新メガの各巻に付属する研究資料を整備することが求められた。後者は具体的には、これらの資料を元に 1868 年秋から一年間にわたってマルクスが作成したノートの内容を分析してその意図を探り、あわせて 1860 年代中葉にイギリスで勃発した恐慌の性格についての彼の認識を明らかにするための研究を行い、論文の形にまとめて発表することであった(下記の雑誌論文⑬)。

このテキスト作成作業にともなってそれぞれのノートに収録されている抜粋・切り抜き文書につぶさに当たることが出来、1860 年代末のマルクスが 1866 年の経済恐慌についてどのような認識を有していたのかについて、いくらかの手がかりを得ることができた。以下はその概要の説明である。

マルクスは 1868 年の秋になってから、1866 年 5 月に勃発した恐慌の展開過程とその余波について具体的な調査を開始した。1840 年代末にロンドンに亡命して以来たえず恐慌の到来とその展開を注視していたマルクスが、なぜこの時に限ってリアル・タイムで恐慌の過程をフォローするのではなく、その実際の勃発から 2 年以上も遅れて初めて前に遡るようにして調査を開始したのか、疑問に思われるかもしれない。この 2 年半の時間的なずれは、彼が恐慌勃発の当時『資本論』第一部の最終仕上げに没頭していて眼前で展開している恐慌について本格的に研究しうる余裕を持たなかったことによって説明される。彼の恐慌についての主として新聞記事からの抜粋がおよそ 2 年半も前に遡って始められているのはこのためである。このための情報源としてマルクスが主として依拠したのは貨幣・金融関連の専門紙 *The Money Market Review* と一般経済紙 *The Economist* それにディケンズの創刊した社会派の日刊紙 *The Daily News* であった。1866 年の恐慌が「すぐれて金融的な性格」を持つことから彼は前者の専門紙を重視したが、しかし、恐慌を幅広い視点から捉えようとする彼の従来からのスタンスを保持すべく後 2 者からの情報収集にも力を注いだ。

主としてこの二紙からの抜粋の内容を全体として見てみると、マルクスがこの時期の情報収集によって目指していたのは、たしかに 1860 年代の恐慌の特殊な性格を把握することでもあったが、それよりもむしろ、彼が『資本論』第一部に続いて当時準備を急いでいた第二部・第三部の執筆に必要な材料・データの収集と研究であったと考えられる。68 年 9 月からの一年間に作成された新聞からの抜粋と切り抜きには貨幣・金融業界の動きだけでなく土地所有や農業にかかわる記事も多数含まれている。このことは、この時の抜粋作業の目的がもっぱら恐慌の研究だけを中心としていたのではなかったからと解釈しなければならないであろう。抜粋の全体はむしろ、『資本論』全三部（これは 1867 年に刊行された第一部を含む第一巻に続く第二巻をもって完結するものと計画されていた）の最終的な仕上げという、マルクスが 1860 年代のなかば以来進めていた研究経過の中に位置づけてこそ、的確に捉えられるのではないだろうか。

しかしこれらのテーマをめぐるマルクスの研究は 1869 年を境にしだいに対象地域をアイルランドやロシアといった、世界資本主義の中心部から周辺部に移動させてゆく。その全体像を捕らえようとすると、もはや新メガ第Ⅳ部門第 19 巻に収録される抜粋ノートの範囲を超えた考察が必要となるが、これは、前回および今回の科研費プロジェクトによる研究の先にある課題となる。しかしそのためには、第Ⅳ部門第 20 巻以下（その多くはまだ編集作業にまったく手がつけられていない状況にある）に収録が予定されている諸資料の参照が不可欠となる。

2016 年 4 月からの三年にわたる今回の研究期間中のマルクスの理論と思想にかかわる研究の一つの柱は、『資本論』第一部初版刊行 150 年そしてマルクス生誕 200 年を記念して、経済理論学会が中心となり国内の関連 7 学会（経済学史学会、基礎経済科学研究所、マルクス・エンゲルス研究者の会、唯物論研究協会、信用理論研究学会、社会思想史学会）が合同で実行委員会を組織して開催した二回にわたるシンポジウムの準備・運営（セッションの司会や討論）に加わりそのための活動を行なうことであった。

前者のシンポジウムは『資本論』第一部初版が 1867 年 9 月 14 日に刊行されてから 150 年後の 2017 年 9 月 16 日に武蔵大学において開催された。実行委員会の方針では、今回のシンポジウムは、翌年に予定されていた次回のシンポジウムの前段という位置付けで、比較的小規模の国内中心の会合を見込んでいたが、事前の広報活動が功を奏したのか予想を大きく上回る 200 人以上の参加者を得て、一日活発な討論がなされた。

また、二回目のマルクス生誕 200 年記念シンポジウムは 2018 年 12 月 22 日と 23 日の二日間にわたって法政大学市ヶ谷キャンパスを会場に開催された。国内外から多数のマルクス研究者が参加し通訳も入れて二日間にわたって現代世界におけるマルクスの理論と思想の意味を問う多方面の報告とそれに続く活発な質疑が行われた。参加人数も第一回目とほぼ同規模であったが今回は多数の海外からの参加者が含まれていた。

これらの企画を通じて参加各学会間の協力関係が形成されるとともに、日本のマルクス研究者と海外の研究者との今後に向けての交流のきっかけを得ることができた。また、提出された報告ペーパーをもとに英文による論文集を刊行することも予定されている。

## ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 13 件）

① 竹永　進「1860 年代前半のマルクスの地代論研究---61-63 年草稿、『資本論』第三部主要

原稿第 6 章（65 年）および関連抜粋ノート（リービッヒの農業化学）を中心に---(2)」『経済論集』（大東文化大学経済学会）、査読なし、第 111 号、2019 年 3 月、pp.1-43

② Susumu Takenaga, “Marx on rent: new insights from the new MEGA”, *The European Journal of the History of Economic Thought*, Routledge,査読あり、vol.25, no.5, 2018.10, pp.926-960

③ 竹永　進「1860 年代前半のマルクスの地代論研究---61-63 年草稿、『資本論』第三部主要原稿第 6 章（65 年）および関連抜粋ノート（リービッヒの農業化学）を中心に---(1)」『経済論集』（大東文化大学経済学会）、査読なし、第 110 号、2018 年 9 月、pp.1-49

④ Susumu Takenaga, Book review: “*Ricardo on money: a reappraisal* by Ghislain Deleplace, London and New York: Routledge, 2017, xiv+417 p.”, *Cahiers d'économie politique*, L’Harmattan, Paris、査読あり,No.74 2018.7,pp.171-185,

⑤ 竹永　進「リカードの貨幣制度改革プラン---地金支払と国立銀行の設立---(4・結)」『経済論集』（大東文化大学経済学会）、査読なし、第 109 号、2018 年 6 月、pp.1-39

⑥ 竹永　進 「書評　飯田和人著『価値と資本ーー資本主義の理論的基盤』2017 年」、『政経研究』（公益財団法人政治経済研究所）、査読なし、第 110 号、2018 年 6 月、pp.126-132

⑦ 竹永　進「リカードの貨幣制度改革プラン---地金支払と国立銀行の設立---(3)」『経済論集』（大東文化大学経済学会）、査読なし、第 108 号、2017 年 9 月、pp.1-47

⑧ 竹永　進「リカードの貨幣制度改革プラン---地金支払と国立銀行の設立---(2)」『経済論集』（大東文化大学経済学会）、査読なし、第 107 号、2017 年 5 月、pp.1-51

⑨ 竹永　進「リカードの貨幣制度改革プラン―地金支払と国立銀行の設立-(2)」、『経済論集』、査読なし、第 107 号、大東文化大学経済学会、2017 年 3 月、1-51 ページ

⑩ 竹永　進 ‘François Allisson, *Value and Prices in Russian Economic Thought: A journey inside the Russian synthesis, 1890-1920*’, 『経済学史研究』、査読なし、58 巻 2 号、2017 年 1 月、28-30 ページ

⑪ 竹永　進「探索経済学的“歴史路標” ―関于深化経済思想史研究的対話(顔鵬飛武漢大学教授，顧海良武漢大学元学長)」『光明日報』、査読なし、2017 年 1 月 3 日

⑫竹永　進「リカードの貨幣制度改革プラン―地金支払と国立銀行の設立-(1)」、『経済論集』、査読なし、第 106 号、大東文化大学経済学会、81-120 ページ、2016 年 10 月（査読なし）

⑬ Susumu Takenaga, Marx’s ‘Exzerpthefte’ of the later 1860s and the Economic Crisis of 1866, *Marx-Engels Jarhbuch*, 査読あり, DeGruyter Akademie Forschung Germany, No.16 Sep.2016, pp.71-102

〔学会発表〕（計 9 件）

① Susumu Takenaga, “Ricardo on Money (Ghislain Deleplace, 2017): Discussions with the Author”, The International Workshop on Classical Monetary Theory, 14 March 2019, Tokyo, Rikkyo University

② Susumu Takenaga, “I.I. Rubin's Essays on Marx's theory of money,” the 12th annual conference of the World Association of Political Economy (WAPE), WAPE, November 3, 2017, Moscow Finance and Law University (MFUA), Moscow, Russia

③ Susumu Takenaga, “Marx's research on the theory of ground rent during the first half of the 1860s,” Marx's 1818 / 2018 New developments on Karl Marx's thought and writings, the research centre Triangle and the European Journal of the History of Economic Thought, September 28, 2017, Centre Bosco, Lyon, France

④ 竹永　進「マルクス記念シンポジウム総合討論」 21 世紀におけるマルクス　『資本論』150 年記念シンポジウム、 マルクス記念シンポジウム実行委員会、2017 年 9 月 16 日、 武蔵大学、江古田キャンパス

⑤ Susumu, Takenaga, “The initial plan of Ricardo for the monetary reform, how was it conceived, what were its consequences?” 21st annual ESHET conference, European Society for the History of Economic Thought, May 19, 2017, Antwerp, Belgium

⑥ Susumu Takenaga, “Ricardo's Initial Plan for the Monetary Reform (How Was it Conceived, and What Were Its Consequences?,” International Workshop on Classical Economists and Classical Monetary Theory, March 15, 2017, Rikkyo University, Tokyo

⑦ Susumu Takenaga, Understanding Marx's texts, Keio Summer School of Marxian Economics. Keio University, Mita, Minatoku Tokyo、08 Aug. 2016

⑧ Susumu Takenaga, “Plan of Ricardo for the reform of monetary regime, bullion payment and establishment of a National Bank”, RICARDO CONFERENCE To commemorate the bicentenary of David Ricardo's Proposals for an Economical and Secure Currency, the Royal Economic Society, the Ricardo Society of Japan, the Open Political Economy Group at The Open University, and the Money and Development Seminar of SOAS, University of London, London, England, 3rd June 2016

⑨ Susumu Takenaga, Completion of the Part II of new MEGA ---outstanding issues and possibilities---, European Society for the History of Economic Thought, University

de Pantheon Sorbonne, Paris, France, 26th May 2016

〔図書〕（計 3 件）

① Сусуму Такенага, "Исаак Рубин и спор о природе стоимости в Советском Союзе в 1920-х гг", in *И.И. Рубин: Политическая Экономия и Современность*, стр. 66-117, Российская Академия Наук Институт Экономики, 2017.8

② 竹永　進『大戦間期日本のリカード研究』（編著）、法政大学出版局、2017 年 2 月、395 ページ

③ 竹永　進、『ルービン　マルクス貨幣論概説』（編訳・附属資料）、法政大学出版局、2016 年 12 月、342 ページ

〔産業財産権〕

○出願状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等　なし

６．研究組織（研究代表者による単独研究）

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。